

コレクシヨン

半沢鏡

コレクション

私の愛する息子 創太へ

病床から目を覚ます度に、自分の体が弱っていくことを感じます。私に残された時間の僅かさを痛切に実感します。そんな幾許も無い余生ですが、病室で創太と話す時間のおかげで、穏やかな眠りに就けそうです。創太は私の息子という鼻肩目なしにも、その温もりと清らかさで、人を澄んだ幸せな気持ちにさせてくれる美しい心を持っています。私は父として創太を支える立場でしたが、同時に息子の美しい心によって日々支えられる立場でもありました。本当にありがとうございます。愛しています。

創太に感謝を伝えることも、この遺書を記した一つの目的ですが、実は私の死後について創太に一つお願いを頼みたいのです。実家の地下室には私のコレクションがあるのを見たことがあると思います。そのコレクションの処分をお願いしたいのです。処分の方法については創太にお任せします。売却や廃棄などの、どの処分法でも構いません。地下室には鍵のかかった部屋もありましたが、そちらにも私のコレクションがあるので、処分をお願いしたいです。この遺書が入っ

た封筒に同封されていた鍵がその鍵です。かなり手間のかかる作業だと思いますが、完遂してくれると助かります。

愛する息子への最後のお願いがこのような形になってしまったことを、とても申し訳なく思います。

二〇四五年三月八日 高村茂^{しげる}〃

改めて父からの遺書を読み返した私は、鞆にその遺書と、共に託された地下室の鍵を入れて、実家へ向かう準備を整える。靴を履き、玄関の扉を開けると、少し冷たい乾いた風が頬を撫でるのを感じた。そしてマンションを出て、最寄りの駅へ向かう途中、ぼんやりと父の遺書が思い出された。

この遺書は生前、私が見舞いに行った際に父から直接受け取った。余命宣告を受けた父は終活の一環として遺書を書いたらしい。そのときは鍵が入っているとは知らなかったのも、遺書にしてはやや重いと思ったことを覚えている。それから父は終活を完了させると、延命治療を取り止め、緩やかに生涯を終えた。葬儀や気持ちの整理が落ち着いたちょうど一週間後に、封筒の重さが少々気がかりだったので、父の遺書を読むことにした。

遺書の中で父からコレクションの処分を頼まれるのは意外だった。そもそも父の財産は一人息子の私が自由に管理してよいという取り決めて生前整理を済ませていたのに、わざわざコレクションの処分をお願いしてきたからだ。また父のコレクションというのは美少女フィギュアだっ

たと記憶しているからでもある。父からはあまり地下室に行かないように言われていたが、遙か昔の小学生のときに、少年の冒険心に任せておどろおどろしく見えた地下室を探検したことがあった。地下室に置かれていたのはだたのフィギュアで出端を挫かれたのを覚えている。しかし父が遺書という形で私にお願いしているということは、何かしらの意味があるのだろうと思った。気になった私は遺書を読んだ翌日には、実家の地下室に向かうことにしたのである。

考えをめぐらしている内に最寄り駅に到着していた。パスを使って駅構内に入場し、父の実家へ向かう電車に乗る。途中、乗り換えが必要だが、一時間程度で実家に到着することができる。車内の座席に着き、そのままガタゴトと揺られていた。うつろいゆく車窓の景色を眺めつつ、再び父のことを思い出していた。

私が五歳のときにはもう、父と私だけの家庭となっていた。父の話によると、母親は不倫した末に夜逃げしたらしい。父は生物を専門とする大学教授だったため、経済的に困ることはなかった。しかし家事・育児と仕事の両立は大変だっただろう。親に負担をかけたくないという思いから、大学生になると一人暮らしを始めたが、そのときに父の苦勞を痛感した。人は日々をただ「生きる」というだけで、これほどたくさんさんの勞力を消費するとは思わなかった。病めるときも、悲しみのときも、生きることを尽くさなければならぬ。父はその上、もう一人の人間である私の生活と、自分の仕事も背負っていたと思うと、父の苦勞は計り知れないものだと思った。年齢的にはもうすぐ大人だったが、自分の幼さをこのとき実感した。

つまり、いわゆる父子家庭で育ったため、家族団樂だんらんの時間は少なかった。そうなると思議な

もので、お互いを家族として大切に感じているはずなのに、どこか妙によそよそしい関係になってしまっていた。社会人になってからは親孝行がてら、年に一回は父と旅行に行っていたが、なんだか家族というよりはむしろ、尊敬する上司や友達に近い感覚を覚えた。居心地の良いものではあったが、家族という関係で見れば、どこか一つの線で区切られているかのような感じでした。

父が入院してからは、仕事の合間を縫ってお見舞いに行くようにした。思い出話をして過去の感傷に浸ったり、父の人生観に耳を傾けたりしていた。病室でこれまでの時間を埋めていく内に、父とのしこりもだんだんと解れていくのを感じた。きつとお互いに、こうしてゆっくりと対話する機会を心のどこかでは求めていたのだろう。

病室での父との会話で特に印象に残ったのは「美しさ」についての話だった。父はこう語っていた。

「連綿と続く科学の営みを人は紡いでいるのにも関わらず、生命の神秘は未だに解き明かすことはできていない。例えば人間の腎臓は腹の中に納まるサイズで、生命に必要な機能を担っているが、これを再現することはできていない。現在の人工透析器を腹の中に入れてしまったら、腹が破裂してしまう。科学というものは究めれば究めるほど世界の理解が深まるが、同時に未知を認識させられ、人の理解の範囲はこれだけちっぽけなものかと感じるようになる。特に私の研究テーマである心は誰もが持っているありふれたものだけど、最もミステリアスなものにも感じる。しかし未知だからといって、得体の知れない気味悪さのようなものを感じることもなく、得

体の知れないながらも心によって私たちはむしろ幸せを感じている。だから私は心を「美しい」と感じ、それを研究していたんだ。それでも中にはもちろん、反対に周囲を穢すような「醜い」心を持った人間もいる。創太はとつても「美しい」心を持っているのだから、私が死んだ後もそれを穢すことなく生き続けて欲しい」

まるで生命を燃焼させるかの如く科学に向き合った父の信念を感じ、ひどく心打たれた。父の言う美的価値観は分かるようで、分からない感じがしたが、研究者の未知のものに対する姿勢を見習って、その未知を探索し続けていくことが大切なのではないかと感じた。

そのうち目的の駅に着く。そこから父のことを思い出していたからであろう。懐古の念をひどく感じ、実家に向かう前に周辺を漫ろに散策した。昔はなかったものが今は当たり前のようであったり、逆に昔あったものが今やなくなったりしており、その新旧入り混じった様は懐かしさにいっそう拍車を掛ける。

一時間ほどしたところで散策を止め、実家に向かうことにした。実家に到着してからも、なんとなく一つ一つの部屋を見回していった。ひととおり懐かしさに浸り終えると、鞆や上着を置き、鍵だけを持って地下室へと向かう。

地下室へと続く階段を下りていき、近くの電灯のスイッチをつけた。地下室には父の美少女フィギュアのコレクションが飾られていることには変わりなかったが、部屋の雰囲気は様変わりしていた。私の実家は事業に成功した祖父が建てたものなので、内装は木を基調とした一昔前の造りであった。しかし現在の地下室はいかにも現代風なものとなっている。壁やコレクションを

飾る棚は白色で、床には明るめの色調の木材が敷き詰められていて、シンプルで小ぎれいな印象を感じさせる。また棚にはコレクションを下から薄く照らす間接照明が備え付けられていて、父のこだわりを感じる。おそらく私が実家を離れている間にリノベーションしたのであろう。ただ鍵の掛かった部屋への木製の扉は、ニスを新たに塗り直すこともせず旧態依然としていた。一つのピースだけ別のパズルから当て嵌めたジグソーパズルのようで、やや異質さを感じさせる。

とりあえず父のコレクションを軽く見ていく。とは言え、私に美少女フィギュアを鑑賞する趣味は全くなかったので、二三個見たところで全てのフィギュアが同一のもののように感じられ、それ以降は鑑賞というより視界に入れただけという表現の方が正しい。そもそもフィギュアのみならず、絵画や彫刻などの万人受けの芸術品の美しさでさえも私には解する心がない。そういう趣味を味わう感性というものは、どのように獲得すれば良いのだろうか。人生の半分を過ぎ、初老となった私にとってはおもひきり遅すぎる話かもしれないけれども。

コレクションを眺め終えると、感性のない私がおくも豚に真珠なので、これらを売却することに決めた。美少女フィギュアの値段を事前に調べていたが、高級なフィギュアはプレミアがつくことが多いらしい。棚に飾れなくて箱に入ったままのものもあるが、飾られているものだけでもざっと五十はあるので、かなりの金額にはなるだろう。

美少女フィギュアの処遇を決めたところで、次は鍵の掛かった部屋のコレクションを見ることにする。鍵がかかっていたので、中を確かめたことはない。父は私が地下室に入るのを、そこはかとなく嫌がっていたので、中身が何であるかを尋ねるのも躊躇っていた。しかし今日でその謎

が明らかになるのでワクワクすると同時に、扉の怪しさから胸騒ぎもする。鍵をドアノブに差し込み回すと、カチャツ——という小気味の好い音で開錠された。ドアノブに手を伸ばして、部屋の中に立ち入った。

ドアの近くにあったスイッチを押すと、ミルクガラスで加工された天井のランプが暖色を帯びた光を発した。部屋の中は木材をあしらった古めかしい造りで、おそらくこちらは改装していないのだろう。広さは前室に比べて狭くなっており五畳ほどである。部屋の両脇には、木の質感をそのまま残して加工された戸棚がずらりと並んでいる。経年劣化で焦げ茶色から少し明るくなったような色味をしている。戸棚に四方を囲まれているような錯覚を覚え、圧迫感を感じた。しかし最も存在感を放つのは、奥にある黒いカーテンである。その突っ張り棒で吊るされたカーテンにより部屋の一部は区切られているようだった。

前室と異なるやや暗い雰囲気に対し身が竦んだが、好奇心は消えずにいたので、まずはすぐ脇にある戸棚を開けることにした。扉を横にスライドさせていくと——猫の死骸が見えた。視認した瞬間、体が仰け反った。遅れて自分の心臓の音がドクンドクンと克明に響いた。しばらくして鼓動が小さくなっていき、落ち着きを取り戻した私は、眉を顰めながら戸棚の中を改めて見る。そこには猫の死骸が変わわずあったが、猫の死骸というより猫のホルマリン標本といった方が正確だろう。胴体がすっぽり収まるほどの縦長の瓶に、内臓などを見えやすくするためだろう、猫は万歳をする形で詰められている。上から肋骨、肋骨の隙間から覗く肺、肝臓、腸と、その生々しい内臓が猫の中心に整列していた。幸い猫の目は閉じられていたが、生理的嫌悪感からあまり

直視はしたくなかった。

引き戸と猫の瓶の間から同じポーズの鼠や、脳みそを剥き出しにした猿の頭の標本も露見していたが、到底見る気になれず引き戸を閉めた。両脇にある戸棚の中身の全てはおそらく標本であろう。そう認識してしまうと、戸棚からの圧迫感はいっそう増し、黒い瘴気が戸から漏れ出ているかのように思える。この標本たちも父のコレクションということだろうか。これも父の言う「美しい」ものであろうか。

これらの標本は明らかに私の手に余るものなので、父と同じ研究職の方に売るなり、譲るなりするのが良いと思った。しかし研究者というものは、こういった生理的嫌悪感を感じるものでもあっても、ある種の情熱を持って研究しているのだろう。いや、父の姿勢を鑑みるに、研究者とはある種の病的な偏愛を患っていると思えた方が収まりが良いように感じる。

後はフィギュア買取業者や研究機関に連絡を取り、地下室からコレクションをなくしまえば、父からの依頼を果たしたことになるのだろうか。そうとは言えない違和感が心に引っ掛かる。その歪感^{いびつかん}はあの黒いカーテンの奥に集約^{しやく}していた。

私はゆっくりと黒いカーテンの許^{もと}まで辿り着く。両開きのカーテンの片方を右手で摘みながら開き、流し目で奥を恐る恐る覗いていく。すると奥にはまた戸棚があった。

両脇にあったものと同じ材質の戸棚だった。ところが大きさなどは異なっていた。両脇にあった戸棚の一区画は横幅は私の肩幅よりも若干大きく、高さはちょうど私の腰当たりくらいで、その区画が縦に二つ連なっていた。一方、奥の戸棚は横幅は変わらないが、高さは私の身長より少

し低く、一区画しかなかった。また引き戸ではなく両開き戸になっている。形としてはクロゼットやロッカーに近かった。

この中にも標本があるのだろうか。大型の動物の標本だろうか。気分が悪く、開けたくはない。中を見たくはない。しかし父がわざわざ遺書によってコレクシヨンの処分を頼んだ意味がその奥に詰まっている気がする。恐怖心を、中を覗こうとする好奇心と違和感を拭いたい焦燥心で無理矢理に塗り潰して、両方の取っ手を握る。足は竦み、心臓は重く拍動を体内に響かせる。右の取っ手を恐る恐る引き、隙間から入射した光が中の暗闇を照らし出すと――

物体の中では最も「美しい」父のコレクシヨンが眠っていた。